

40 歳になった高卒女性の現状から見る 日本社会の課題

杉田 真衣

- 1 「第二標準」と「航海者」
- 2 『高卒女性の12年』で描いた4人の軌跡
- 3 4人の軌跡から見えてきたこと
- 4 40代を迎えた彼女たちの概況
- 5 30歳から40歳にかけての変化と今
- 6 東京23区で暮らす若年女性を対象とした別の調査から
- 7 二つの調査研究から考えること
- 8 問題の可視化とこれからの課題

1 「第二標準」と「航海者」

周知のように、日本では1990年代後半以降、若者の〈学校から仕事へ〉の移行のあり方が大きく変容した。新規学卒一括採用により学校から仕事へと「間断なき移行」をし、年功賃金や終身雇用制度をもとに暮らしていくという日本の戦後の標準的なライフコースが縮小し、非正規雇用や失業が増加した。その背景には、日本経営者団体連盟が1995年に発表した「新時代の『日本的経営』」に象徴される企業の雇用戦略や労働者派遣法等の労働法制の転換があることが指摘されてきた。にもかかわらず、非正規雇用労働者の増加の要因は若者の意識にあるとする認識が存在し、「勤労観」を養う教育の必要性が叫ばれるようになった。

そこで筆者ら東京都立大学／首都大学東京の調査研究グループは、若者一人ひとりの高校卒業後の履歴を、その背景にある社会経済的な状況、文化的な状況や、そこでのかれらの意識も含めて聞き取るインタビューを2002年より開始した。東京都内の二つの公立普通科高校、いわゆる偏差値ランクで言えば「中位校」のA高校と「最低位校」であるB高校の若者を対象とした経年的インタビューである。高校3年在学時(89人)、高卒1年目(53人)、高卒3年目(39人)、高卒5年目(33人)に実施した。

この調査研究においては、各回の調査を実施するたびに結果を報告し、その際には調査協力者全

員のケースを進路別に分けて網羅的に取り上げ、分析した⁽¹⁾。調査協力者たちが同時期にそれぞれの進路においてどういった状況にあるのかを描く、時間軸で言えば横軸の報告であった。それに加えて、縦軸でも、つまり限られた字数のほとんど全てを使って若者一人ひとりが学卒後にどういった履歴を辿ったのかを追うものを書いてみたいと考えた筆者は、庄山真紀さん（仮名。以下同様）という一人のケースのみを取り上げ、その高卒3年目までの軌跡を描くことを試みた⁽²⁾。その内容を青年・労働問題研究会という研究会で報告したことが、この研究会で作った書籍『ノンエリート青年の社会空間』において庄山さんを含むB高校出身の5人の若年女性たちの履歴について書くことへとつながった⁽³⁾。

この書籍においては、本号の「特集にあたって」で栗原耕平が述べているように、中西新太郎が「第二標準」について論じている。中西（2008）は先述した1990年代後半以降の動きを「構造改革時代の格差・貧困化」だと捉え、構造改革時代とは「新自由主義構造改革が社会システム全般の再編を促し具現化してきた時代」（19頁）であるとする。中西（2009）によれば、この時代に「従来の『底辺層』に限られていた不安定就業に陥る就業・社会化コースが、その規模を大きく広げ、大卒若年者までもとらえる低層の標準的コースとなっていった」（2頁）。ここで言う従来の「底辺層」とは「母子世帯出身者や児童養護施設出身者など、不利な就業・社会化環境に縛り付けられてきた若年層であり、構造改革時代には、これらの層のいっそうの貧困化とともに、より広い若年層での窮迫と貧困化する大衆的貧困が出現」（34-35頁）した。不安定な労働と生活を強いられる層を、縮減した中位層のライフコース標準から外れた存在だとみなすことは、外れないようにするにはどうすればよいかという思考につながり、この層が直面している困難そのものの社会問題化を妨げることとなる。そうではなく、別様のライフコース標準が生まれていると把握し、それに規定された生活において「なんとかやっていく」なかで生み出されている行動規範や生活戦術を捉えることで、別様の社会形成の構想が見えてくることを中西は示唆している。「第二標準」とはこうした別様のライフコース標準のことであり、具体的には月収20万円、年収200万円台程度のレベルの「男女共働きの非年功・低位キャリアパターン」が第二標準化した状況があるとされた（中西2004：231頁）。

こうした中西の議論においてとりわけ注目されたのが、よりましな状況を求めながら「なんとか

(1) 乾彰夫ほか（2003）「『世界都市』東京における若者の〈学校から雇用へ〉の移行過程に関する研究」『教育科学研究』第20号、乾彰夫ほか（2005）「“高校卒業1年目”を生きぬく若者たち——『世界都市』東京における若者の〈学校から雇用へ〉の移行過程に関する研究Ⅱ」『人文学報』359号、乾彰夫ほか（2007）「社会と向きあう若者たち：高卒3年目の分岐——『世界都市』東京における若者の〈学校から雇用へ〉の移行過程に関する研究Ⅲ」『教育科学研究』第22号、乾彰夫ほか（2009）「『新時代』を働き・生きる若者たち：高卒5年目の人生経路——『世界都市』東京における若者の〈学校から雇用へ〉の移行過程に関する研究Ⅳ」『教育科学研究』第24号。これらのほかに、乾彰夫編（2006）『18歳の今を生きぬく——高卒1年目の選択』青木書店、乾彰夫編（2013）『高卒5年 どう生き、これからどう生きるのか——若者たちが今〈大人になる〉とは』大月書店等がある。

(2) 杉田真衣（2008）「高卒フリーター女性の仕事と生活」『季刊セクシュアリティ』34号。

(3) 杉田真衣（2009）「大都市の周縁で生きていく——高卒若年女性たちの五年間」中西新太郎・高山智樹編『ノンエリート青年の社会空間——働くこと、生きること、「大人になる」ということ』大月書店。

やっていく世界」を生きるノンエリート青年⁽⁴⁾を「漂流者」ではなく「航海者」として捉える見方である。この捉え方における中西（2009）の強調点は、その航海が、社会的な孤立が深刻化するなかにあつて、偶然再会した折にお金を貸してくれた以前のアルバイト先の店長といった存在も含めた「親密な他者」とともに行われていることにある。「所与の現実のなかでよりよいポジションを得るための実際的行動には、たとえ微細な変化のように見えても、経験の蓄積と言うに値する『航海者』としての軌跡が看取できるのである。なかでも、新自由主義的社会環境が強いる『漂流』に効果的に抗うための『他者』の探索と発見は、構造改革時代の就業と生活における共同航海の試みとして読みとることができるだろう」（32頁）。この議論をふまえると、筆者が『ノンエリート青年の社会空間』において描いたのは、5人の女性たちによる「共同航海の試み」であると言える。

2 『高卒女性の12年』で描いた4人の軌跡

東京都立大学／首都大学東京の調査研究グループによる共同調査が終了した後、筆者は『ノンエリート青年の社会空間』で取り上げた5人のうち4人の女性たちに対するインタビューを続けることとなった。そもそもなぜこの5人だったのか。その理由の一つは、不安定な生活を強いられている若者のなかでも、ノンエリートであり女性である彼女たちは不利が折り重なる状況で生きていたからである。もう一つの理由は、高校を卒業した後も彼女たちが互いにつながり合っており、彼女たちにとってそうしたつながりがどのような意味を持っているのかを探りたいと考えたからである。4人へのインタビューは、高卒10年目（2012～2013年）と高卒12年目（2014～2015年）に行い、その結果ももとにして、4人それぞれが高校を卒業して30歳になるまでに辿った道を『高卒女性の12年』という書籍にまとめて発表した⁽⁵⁾。

4人の履歴を概観すると、庄山真紀さんは、調理の専門学校への進学を希望していたが学費が捻出できず諦めて、アルバイトで弁当・惣菜の店に入った。途中で他の店とかけもちで働くこともありながら3年ほど働き続け、そこを辞めた後も飲食店、カラオケや雀荘等で非正規で働き続けた。母親と二人で暮らしていたが、高卒4年目に母親が病死し、以後、恋人と同棲していた期間を挟みつつ、一人暮らしを続けた。西澤さん（後出）の両親は、庄山さんが恋人と同棲していた住まいを出る際に新居の保証人になったり引っ越しを手伝ったりするなどして、家族を亡くした庄山さんのことを支えた。さらには、母親の死後、母親との交際を望んでいたという50代男性の東森さんから連絡があり東森さんが経営していて母が生前働いていたという寿司店でも働き始めた。以後、寿司店で働きながら、カラオケ店とかけもちしたりコンビニエンスストアとかけもちしたりする生活

(4) 高山（2009）は「ノンエリート（青年）」という概念について、「新規一括採用による正規雇用での就職、そして男性の場合は長期雇用による初職の継続と年功序列による昇進を前提とした世帯形成、一方女性の場合は結婚退職をある程度まで前提とした就職と（上述のような男性との）世帯形成後の専業主婦化ないしは必要に応じたパート勤め、そして年金および子どもからの援助による退職後の生活、という『典型的』で『平均的』とされる『日本型雇用』を基盤にしたライフコースを展望できない人々を『層』として把握することを目指すものである」と述べている（353頁）。

(5) 杉田真衣（2015）『高卒女性の12年——不安定な労働、ゆるやかなつながり』大月書店。

が続いた。

西澤菜穂子さんは、高校卒業後に縁故で正規就職をするも、うつ状態になるなどして3ヶ月で辞めざるを得ず、心身が回復してからは非正規の仕事をしていった。仕事を変えていく間には、庄山さんや他の友人と一緒にクラブやキャバクラで働いていた期間もあった。高卒5年目にインターネットの出会い系サイトのサクラの仕事を始め、この仕事は高卒12年目まで続いていた。高卒8年目頃から声優の養成所に1年通い、その後もボイストレーニングや演劇のレッスンを受けたり、声優のワークショップに参加したりして、高卒12年目にはボイストレーニングの学校で講師にならないかと声をかけられていた。

浜野美帆さんは、美容の専門学校への進学を経済的な理由で断念し、美容室に正規で就職するも1年3ヶ月で離職となり、それからは非正規の仕事に就いていった。ヘルニアが悪化して手術を受け、働けなくなったので生活保護の受給を始めた。回復後、ケースワーカーから教わった職業訓練制度を使ってパソコンの使い方やウェブデザインを学んだ。その後は仕事が見つからずに派遣で倉庫で働いていたが、デリバリーヘルス（無店舗型性風俗）のホームページを作る仕事を見つけ、高卒10年目にアルバイトで働き始めた。実際に任された仕事はキャストの求人、5ヶ月続けて正規雇用へと転換した。その後はキャストのまかないを作る仕事に加わりつつ、ホームページに載せるキャストの宣伝用の写真を「修正」する仕事へと異動した。高卒6年目に実家を出て一人暮らしを始めることができたが、病気で働けない母と暮らす姉が浜野さんの銀行口座を管理し、生活費は姉から渡されていた。

岸田さやかさんの高校3年の時の夢は「花嫁さん」で、保育士になることも「一応夢」だったが、親から進学せず働いて収入を家に入れるようにと言われていたため、スーパーでアルバイトで働いた。クラスメイトの相良健さんと高校2年の時から交際し、親公認で双方の自宅に泊まり合う生活を始めて、卒業後もそうした生活は続いた。相良さんは卒業後に就職した建設会社を4ヶ月ほどで辞めるが、それから半年ほどして配管の仕事に就いてからはその仕事を続けた。高卒4年目に結婚し、高卒6年目に第一子が生まれた。出産の前月に中古の一戸建ての家を購入し、出産の約1年後には相良さんが板金塗装の設備・資材を供給する会社の営業へと転職した。高卒8年目に第二子が誕生し、11年目には妊娠・出産を機に中断していた仕事を再開した。

3 4人の軌跡から見えてきたこと

彼女たちの高卒後の軌跡から何が見えてくるか。進路選択に関していえば、高校生のときから労働者であって、家計を支える存在となっており、進路選択においては経済的な制約を著しく受けていた。調査全体の結果からは、数少ない大学への推薦入試による進学や正規雇用就業は男性が多いというように、ジェンダー差も見られた。

労働経験としては、時給は低く、希望通りにシフトを入れられるわけではないので、働かされすぎたり、逆に働けなくて減収を強いられたりしていた。正社員並みに働かされながら病休すら許されないことがあり、ハラスメントにも遭っていた。複数の仕事をかけもちすることで安定させようとしても、なかなか思うようにはいかなかった。より高い収入を求めてキャバクラ等の仕事へと参

入しても、収入を安定させて仕事を継続することは難しかった。正規で就職できた場合であっても、長時間・低賃金で酷使され、同期不在のなかで孤立させられて、辞めることになった。一度正規の仕事を辞めても、相良さんのように男性は別の正規の仕事に就けていたのに対して、女性には再就職が難しく、できていたのは浜野さんのみである。それでも彼女たちは、たとえ不安定な仕事でも、たとえば週1日以上は心身を休ませられるように自分で一週間のスケジュールを組むというように、働き続けるための知恵や技を身につけていっていた。中西の言う生活戦術である。とはいえ、仕事を通じてアイデンティティを形成することは難しく、将来展望も描きにくかった。

彼女たちの生活の状況を見ると、高校在学時から結婚を二人の目標として生活していた岸田さん・相良さん以外は、結婚願望を抱く時期はあっても結婚や子を持つことは難しかった。交際相手の男性もまた不安定な仕事に就かざるを得ないうえに、女性に「貢がせ」たり束縛したりすることがあった。先の見えない生活において、バンド（ミュージシャン）の追っかけ、コスプレ、声優、同人誌、テーマパークなどの消費文化が支えになっており、西澤さんのようにこうした文化を通して将来展望を描くこともあった。

彼女たちの生活を支えていたものに、高校在学時に形成された友人関係がある。時に関係が切れたり、つながっていてもさほど会わなくなったりするが、関係が完全に切断されることはなかった。その条件としては、育った範囲を大きく超えて生活することがないことや、B高校の思い出話を共有していることがあった。前者に関して言えば、経済的な条件によって行動範囲が限定される傾向にあることは制約であると言え、そこに不平等があると見るができるが、彼女たちの生活に安定性をもたらしている側面もあることがわかった。後者の、高校の思い出話があるということや、その話ができる関係があるということは、一見すると他愛のないことである。しかし、高校の思い出話ができることは、「その時から何年経って、いまがある」というように、彼女たちに「いま、ここにいる」ということの感触を得られる関係や場をもたらしており、展望が描きにくい、先行きの見えない生活を送る彼女たちにとって、そのことの意義は決して小さくない。くわえて、庄山さんは西澤さんの親たちや母親の死後通い始めた地域のメンタルクリニックの医師に見守られ、浜野さんには生活保護を受け続けるよう働きかけたケースワーカーがいたというように、地域の年上の人や医療・福祉関係者の存在も彼女たちを支えていた。彼女たちの人生経路において登場するこれらの人たちは中西の言う「親密な他者」に位置づけられるであろうし、彼女たちの高卒後12年にわたる軌跡は「共同航海」の航路であると言えるだろう。

4 40代を迎えた彼女たちの概況

2025年現在、彼女たちは高卒23年目となり、40～41歳になっている。4人とはその後もつながっており、最新のインタビューとしては、2025年10月に庄山さん、西澤さん、浜野さんの話を

聞いた⁽⁶⁾。3人の状況を見ていく。

庄山さんは、基本的に東森さんの寿司店で働きつつ、ほかのところでも働くという生活を続けていたが、2020年に寿司店が閉店し、それからはいくつかの飲食店を経て、現在も飲食店で働いている。時給は1,250円で1日5時間ほど働くが、シフトは週4日から2～3日に減らされた。もともと体調の関係で長時間働くのは困難でもあり、アルバイトの収入だけでは生活が難しく、東森さんから援助を受けている。しかし東森さんの経済状況や体調も安定しているわけではない。東森さんから養子になってほしいと言われているが、断り続けている。メンタルクリニックの医師からは生活保護を勧められているものの、ペットの病気の治療にお金がかかり、東森さんの援助をあてにせざるを得ないため、申請には至っていない。

西澤さんは、2019年より出会い系サイトのサクラの仕事において給料の未払いが発生し、2023年に会社が倒産した。この仕事はコロナの影響により在宅するようになっていたが、婚約していた幼なじみが2022年に病気により他界し、精神状態が厳しくなって、自宅の外に出られなくなった。友人の勧めでメンタルクリニックに通うようになり、近所であれば出られるようになったが、それでも電車には乗ることができず、仕事でやむを得ず地元を離れる場合は親や妹が運転する車に乗って移動している。区が内職の仕事を紹介していると母親から聞いて、ゴム製品のバリ取りの内職を始めたが、月3,000円にしかならず、重い製品を運んでいる時に怪我もして辞めた。成人向けゲームの仕事(1件1.5円)を見つけると、出会い系サイトのサクラの仕事との共通点があったために仕事ぶりが認められ、入社して3日で責任のある立場(時給800円が加算される)を任されたが、そうした立場は西澤さんの体調にとってはきつくなり、1ヶ月で辞めた。その後は、地域についての情報(店舗に多目的トイレはあるか等)を集めたりその地域を紹介するネット記事を書いたりする仕事を在宅でしているが、収入はとて暮らしていける額ではないという。

浜野さんの仕事は変わっていない。コロナの影響で客が減った時期も、雇用は継続した。ただし、正規雇用へ転換してから12年以上経つにもかかわらず、月収はさほど上がったようには感じられていなかった(入社10年目までは毎年昇給があったが、その分税金もかかるため)。月収の額は「新卒初任給くらい」で、ボーナスはあるというが、2024年からは副業を始めた。寝たきりだった母親が2023年に亡くなり、その後も姉と弟はアルバイトをしながら同じ住まいで暮らし続けている。収入を全て家に入れる生活は、高卒20年目のインタビューの時(母親が他界する前)には終わっていたが、自分の医療費にお金がかかると話しており、その状況はその後変わらないようであった。何人かの男性との交際を経験していたが、暴力をふるわれるなどして、いずれも相

(6) 4人にインタビューを行った日を記す。庄山真紀さんは2002年12月12日、2004年7月21日、2006年4月22日、2008年2月26日、2013年3月30日、2015年3月1日、2016年3月30日、2022年3月21日、2025年10月1日に実施した(筆者は2006年からインタビューを担当)。西澤菜穂子さんは2002年12月12日、2004年2月26日(浜野さん同席)、2006年3月23日、2008年2月8日(浜野さんと)、2012年8月2日、2015年2月21日、2025年10月4日に行った(筆者は2008年からインタビューを担当)。浜野美帆さんは2002年12月11日(岸田さんと)、2004年2月13日、2006年3月8日、2008年2月8日(西澤さんと)、2013年3月29日、2015年2月21日、2016年3月21日、2025年10月3日に実施した(筆者は2008年からインタビューを担当)。岸田さやかさんは2002年12月11日(浜野さんと)、2004年1月16日、2006年1月29日、2008年2月17日、2013年3月24日、2015年3月25日、2016年2月7日(2～6回目は相良さんと。筆者は2006年からインタビューを担当)。

手の問題で交際を終えてきていた。暴力の被害に遭った際には、姉が支えてくれた。

5 30 歳から 40 歳にかけての変化と今

以上の 3 人の状況から、『高卒女性の 12 年』刊行後 10 年ほどが経つ間にどのような変化があったのか、もしくはなかったのかを確認したい。

労働に関しては、高卒 12 年目の調査までは時給 800 円台の仕事が多かったが、最低賃金の上昇により、1,200 円台まで上がっていた。とはいえ、シフトを減らされたり、会社の倒産により失業したりして、より不安定な状況にあった。正社員の浜野さんの給料は、10 年以上勤めても大きくは上がっていなかった。そのほかの変化として、庄山さんの話からは、飲食店でともに働く人たちが外国人となっていることがわかった。2022 年のインタビューの時には、一緒に働く人のほとんどがベトナム人だと話しており、2025 年のインタビューの時には、店長がミャンマー人で、そのほかに正社員として入ってきた人はベトナム人であり、その人が入らなくてはいけないからという理由で、庄山さんのシフトが減らされることになっていた。アルバイトの日本人二人が友人関係にあり、本来ならばホールで働くことになっていたところ、キッチンでおしゃべりをしながら働いていて、その代わりにまだ日本語が話せないミャンマー人の人たちがホールの仕事をせざるを得ず、接客が難しくなっているとのことだった。庄山さんは外国人の同僚に対して差別的なまなざしは向けていなかったが、特段関係を築いているわけでもない様子だった。

生活においては、庄山さんは東森さんに、西澤さんは両親と妹に支えられているが、庄山さんには養子にしたいという東森さんの願いが重い負担にもなっている。結婚に関して言えば、西澤さんは婚約者亡き後を生きぬいており、庄山さんと浜野さんは男性と交際をすることはあっても結婚には至っていない。3 人にとって、交際相手に限らず、他者と親密な関係をつくるのが、金銭トラブルや暴力を引き起こすリスクを生じさせることにつながる場合もあった。『高卒女性の 12 年』で「ゆるやかなつながり」だとした同じ B 高校出身の友人たちとの関係は、完全に切れるところまではいっていないが、あるとも言えない状況だった。たとえば庄山さんは、西澤さんの母親に庄山さん専用の箸と茶碗の用意をされて「いつでも来ていい」と声をかけられ、誕生日には好物をふるまわれることもあったが、コロナ以降、西澤さんの家には行けていないとのことだった。

西澤さんは、ボイストレーニングの学校の講師の仕事を断っていた。出勤日が決まっていた、そのように拘束されると好きなアイドルのライブツアーに行けないなど自由に動けないことが大きな理由だった。その後、自分で作った音声番組をインターネットで配信するようになり、この番組の制作にはかなりの時間と労力をかけて打ち込んだ。音楽配信サービスの会社と契約をして配信していたため、収入源にもなっていた。数年間配信して「やり切った」と区切りをつけ、声優の養成所で出会った発達障害をもつ友人との関わりをきっかけに障害について学び始め、妹の子どもにも障害があって関わってきた経験から、障害のある子どもを支援する仕事がしたいと新たな目標を立て、発達障害支援アドバイザーという資格も取っていた。両親はその目標に賛成しているという。

庄山さんは、テーマパークに通ったり、好きなアーティストのライブに行ったり、好きなキャラクターのグッズを集めたりして、自身の生活を彩りながら暮らしてきた。それでも、20 代の頃か

ら語っていた「長生きはしたくない」という思いは変えられないという。「できれば30歳になる前に死にたい」とも語っていた庄山さんに「40歳という年って、何か意識しました?」とたずねると、「私はちっちゃい時から30歳で死ぬ設計を立ててたので、もうそれから10年ですね。言葉にならないです」と話し、次のようにも語った。

明日死んでも別についていうぐらいのスタンスで、死つていうものはもう目標。(中略)生きてればいいことはあるかもしれない。あるかもしれないけど、それさえもいらなくて私は思う。(中略)今終わらせたいっていう気持ちはやっぱり変わらない。本当にこれがなくなることは、やっぱりないんだなって思います。

庄山さんは以前と変わらず、生きていくことを見通せない日々をなんとか生きている。西澤さんは新たな目標を抱いて学んでいるが、外出が難しい状況が続いており、収入は安定していない。浜野さんは仕事において「新しいことに挑戦するって、そこは多分ないのかも。(中略)今はとりあえず現状を維持して頑張るっていう。将来何かあったらまだきょうだいがいるからいいや」と語り、さしあたり大きな変化はないであろうし、悪化させないようにしたいと望んでいた。30歳から40歳までの10年において状況が好転することはなく、この先に関しては、さらに悪化させないこと、浜野さんが言うように現状を維持すること自体が目標となるような状況を生きていることがうかがえた。

6 東京23区で暮らす若年女性を対象とした別の調査から

筆者は、4人と同じく東京に暮らす女性たちの状況をアンケートとインタビューによって知る機会を得た。4人の現在の状況やその先の展望についてさらに考えるために、この調査の結果も見てみたい⁽⁷⁾。

この調査研究プロジェクトでは、2023年に東京都23区に暮らす18歳から44歳までの女性を対象としてアンケート調査を実施した(有効回答数3,480)。この調査の結果からは、仕事・生活の状況、主観的幸福感や自己肯定感、配偶者の有無と就業形態によってかなり異なっており、無配偶(シングル)無職や無配偶非正規の若年女性が特に厳しい状況にあることがわかった⁽⁸⁾。そして、「生きやすい社会づくりのための行政、企業、地域や社会などに対する提案、自分の将来に対する希望などを自由にお書きください」という質問項目を設けたところ、その自由記述回答には「何も期待できないので、本人が望む場合、安楽死を認めてほしい」(無配偶非正規40代前半)とあり、他にも2名が「安楽死制度」(無配偶無職40代前半と無配偶正規30代後半)と回答した⁽⁹⁾。3,480人のうちの3人のみではあるが、「安楽死」という言葉が複数記述されていることに、生きていくことを見通せない姿がうかがえた。

(7) 特別区長会調査研究機構(2024)『令和5年度調査研究報告書 特別区における女性を取り巻く状況と自治体支援の方策』。なお、本研究プロジェクトのリーダーは江原由美子、副リーダーは脇田彩と筆者であった。

(8) 同報告書、85-128頁。

(9) 同報告書、194頁。

アンケート協力者のうち 12 名のシングルの方々に行ったインタビュー調査⁽¹⁰⁾においては、非正規で働く人たちの中に、長時間労働を強いられるような働き方に疑問を抱いたり体調を崩したりしたことで正規職を辞めた後に非正規の仕事に就いた人たちがおり、そうした人たちは収入は下がっても自分にとってはよりよい働き方であると、インタビュー時に従事していた非正規の仕事肯定的に評価していた。ただし、「非正規で 50 歳、60 歳になった時どうするか」「若いうちは仕事がありますが、年をとったらどうか」（F さん、40 代前半）というように、いまはなんとかなっているけれどもその先は仕事を見つけられなくなるのではないかという不安を抱いていた。

そうした状況において、女性たちを支えていたのは何か。アンケートでの「過去 1 年間に、誰かに悩みごとを相談したことがありますか」という質問（複数回答可）に対する回答を見てみると、最も回答率が高かったのは「配偶者・パートナー」の 35.4%であったが、次に高かったのは「誰にも相談しなかった」の 33.3%だった。配偶者がいるかどうか、また仕事为非正規か正規か無職かで回答者を分類して「誰にも相談しなかった」の回答率を見ると、無配偶非正規職で最も高く、42.8%となった。アンケート調査で「誰にも相談しなかった」と回答した人が多かったことについてどう思うかをインタビュー協力者にたずねると、G さん（30 代後半、正規職）は「私も、誰かに相談しても解決しないと思っています。そういう人にとって、どうせ私は他人です」と話した。K さん（40 代前半、個人事業主）は人に相談しなくても SNS で情報を得ることができるとし、次のように話した。

私は、人と会うことはあまりありません。悩みを相談するというより、結果を事後報告します。「話してどうする」と思います。占いの本は読みます。スマホ時代になり、相談する理由がなくなりました。ツイッターのタイムラインを見たり、接客で客の話聞くことでお腹がいっぱいです。アウトプットする機会はなくてもいいかなと思います。

「誰かに相談しても解決しない」という G さんの語りと、「話してどうする」という K さんの語りに共通するのは、相談したところで解決はしないという認識であり、人間や社会に対する諦念があることがうかがえる。L さん（40 代前半、非正規職）に至っては、「私は悩むことはありません。悩んでも自分で決着させます」と話した。相談しないどころか、悩むこと自体をしないという L さんの言葉からは、何があっても全て自分でなんとかすることで生き抜いていこうとしている姿がうかがえる。

なんとか生活していくために行っていることとして、SNS の利用とともに言及されたのは、「ポイ活（ポイントを貯めて収入を得る活動）」であった。実際にそれによって収入を増やしている人たちがいた。また、働いていると職場の人間関係が難しくなってくるので 1 年ほどで仕事を変えたと話した人もいた。

人間関係も長く一緒にいると、結構なんかこの人のここ嫌だになっていうのが見えてきて、それがちょっとイライラにつながってくるので、そのメンタルケアという面でも、1 年を機にバイトをやめて次に行くっていう。（H さん、30 代前半、非正規職）

(10) 同報告書、129-142 頁。

ここには、人間関係を結び続けず、そこから離れて職場に定着しないことが「メンタルケア」になるという認識がある。

以上の調査結果から見えてきたのは、家庭環境やそれと結びついた学歴の不利がその後の仕事と生活に影響し、さらには主観的幸福感、自己肯定感、将来展望や相談先の有無にまで影響していること、そして、厳しい状況にあるほど相談せず、自分でなんとかしようとする状況であった。

7 二つの調査研究から考えること

ここまで、2003年春に都内の公立普通科高校を卒業した人たちを追跡する調査と、東京23区に暮らす18歳から44歳までの女性を対象として2023年に行った調査の結果を見てきた。そこから考えたいことが二つある。

第一に、「第二標準」をどう考えるかということだ。先に述べたように、中西は「男女共働きの非年功・低位キャリアパターン」が第二標準となったと論じたが、筆者が追跡している4人のうち、岸田さんを除く3人は結婚をしていない。後藤(2024)は、「就業構造基本調査」のデータをもとに、2007年から2022年にかけての未婚率の推移を示している。学歴別に35～39歳の未婚率の推移を見ると、小中高卒女性の未婚率が2022年には大学・大学院卒の未婚率を上回った。雇用形態においても、35～39歳の女性の未婚率は正規が38%から35%へと減少した一方で、非正規は17%から23%へと増加し、雇用形態間の差が縮小した。勤労所得においても、300万円以上の女性の未婚率は、2007年に41%であったが、2022年には36%へと減少した。それに対して、無業の未婚率は9%から20%へと上昇し、有業250万円未満は17%から24%に上昇したという。こうした数値から後藤は、これまで女性は高学歴、正規、高所得である方が未婚率が高いとされてきたが、下がってきており、逆に低学歴、非正規、低所得の未婚率は上昇しているとし、日本型雇用と性別役割分業の縛りは緩んだが新たな格差が拡大しつつあると指摘している⁽¹¹⁾。東京都立大学/首都大学東京の調査研究グループとともに調査を行った木戸口正宏は、岸田さん・庄山さん・西澤さん・浜野さんと同時にB高校を卒業した内田玲奈さんに、2025年にもインタビューを行っている。内田さんは、同じ高校から同時に正規で入社した女性たちが何人も辞めていくなかなか留まり続け、2025年に話を聞いた時には、同期入社の同僚と結婚して5年目、子どもが生まれて4年目となっており、子育てをしながら別の会社で働いていたという⁽¹²⁾。また、西澤さんは婚約者を病気で亡くしている。こうした事実をふまえると、3人のケースからも結婚が難しくなっていることが分かるということには慎重にならなければいけない。しかしそれでも、第二標準にすら届くことができないという状況が、さらに言えば、第二標準という社会標準自体が成り立ち難い状況が広がっ

(11) 後藤道夫(2024)「配偶をめぐる格差——低所得・未婚——の拡大」特定非営利活動法人非営利・協同総合研究所のちとくらし「研究所ニュース」No.88(2024年11月30日)。

(12) 木戸口正宏(2025)『自立をめぐる困難と希望——若者たちの生の軌跡から』高文研、313-315頁。

ていることが推測される⁽¹³⁾。

第二に、「なんとかやっていく世界」における「共同航海」についてである。先述したように、『高卒女性の12年』で描出した「ゆるやかなつながり」は、高卒23年目においては、岸田さんの状況は聞けていないが少なくとも3人においては、完全に切れてはいないものの、弱くなっていた⁽¹⁴⁾。そして、なんとかやっていくために取られている生活戦術として23区在住女性を対象とした調査において聞き取れたのは、仕事を1年ほどで変えていくという働き方であったり、「ポイ活」であったりした。これらはいずれも、共同的ではなく、個人化をいっそう進めるような手立てである。

以上の2点からは、「構造改革時代」に進行した社会的孤立はいっそう深化し、とりわけ西澤さんや浜野さんのように頼れる家族のいない庄山さんは、この先も生きていくという展望を描きにくくなっていることがうかがえる。

8 問題の可視化とこれからの課題

高山（2015）が指摘したように、若年女性の貧困が社会問題化したのは2010年代に入ってからであった（83頁）。2014年の1月にNHKの『クローズアップ現代』で「あしたが見えない～深刻化する“若年女性”の貧困～」という番組が放送され、同年4月には『NHKスペシャル』で「調査報告 女性たちの貧困～“新たな連鎖”の衝撃～」も放送されて、これらの内容は書籍にもなった⁽¹⁵⁾。2014年には、若年女性支援を行う仁藤夢乃の『女子高生の裏社会』やルポライターである鈴木大介の『最貧困女子』も話題となった。2000年代から若年女性支援を行ってきた橘ジュンは、それより前に『漂流少女』を刊行し、その後『最下層女子校生』も発表している。研究としては、日本学術会議社会学委員会「社会変動と若者問題分科会」と労働政策研究・研修機構の共催で2013年と2014年に若年女性の社会的排除と貧困化をテーマとしたシンポジウムが開催され、そこでの内容をもとに小杉礼子・宮本みち子編著『下層化する女性たち』が刊行された。この書籍は、女性の貧困がなぜ見えにくくされてきたのかが論じられるとともに、支援現場からの報告と提起も含めて、女性の貧困をめぐる実態と課題が論じられた。

さらに2018年以降に、国の動きもあった。2018年から2019年にかけて、厚生労働省によって「困難な問題を抱える女性への支援のあり方に関する検討会」が設置され、上記の仁藤や橘など支援活動を行う人たちが構成員となって参加した。この検討会における議論は2022年の「困難な問題を抱える女性への支援に関する法律」の成立へとつながった。それまでの間には、コロナ禍によって女性の困難がいっそう可視化されるということもあった。女性が多く就労する飲食・宿泊業

(13) 筆者は高卒1年目調査を終えた段階では、岸田さんと相良さんが結婚を望みながらも実現へと至れていない状況について、第二標準にすら届いていないと論じたが（杉田2006：68-69頁）、岸田さんに支えられながら相良さんが配管工の仕事に就き、続けられたこと、二人が地道に貯金を続けていたことなどから、その後結婚へと至っていた。

(14) ただし西澤さんは先述した声優養成所時代からの友人との関係を深めていた。

(15) NHK「女性の貧困」取材班（2014）『女性たちの貧困——“新たな連鎖”の衝撃』幻冬舎。

への影響が大きかったことから女性の雇用・生活状況は顕著に悪化し、DV被害の相談や女性の自殺者数が増加し、10代の妊娠相談も増加したからである。内閣府男女共同参画局は2020年に「コロナ下の女性への影響と課題に関する研究会」の開催を決定し、研究会はその翌年まで11回開催されて、報告書が出されるに至った。

「困難な問題を抱える女性への支援に関する法律」が2024年4月に施行されると、自治体は基本計画を策定するなどの対応を始めることとなった。そのこともきっかけとなって、女性支援への社会的な関心がよりいっそう高まることが期待されるが、この法律に関わってはいくつかの議論がある。その一つは、「困難な問題を抱える女性」とは誰のことかということをめぐる議論である。たとえば、自助活動とともにシングル女性の生活実態調査を行うことで中高年シングル女性が置かれている困難な状況について訴えてきた団体「わくわくシニアシングلز」は、「中高年シングル女性を女性支援新法から排除しないでください。厚生労働省に善処を求めます」と呼びかける署名運動をインターネット署名サイト change.org 上で2024年に展開した⁽¹⁶⁾。本稿では、「構造改革時代」の変動の影響を大きく受けながら東京で生活してきた若年女性たちが、50代、60代になっていくにあたっての展望の見えなさを明らかにした。彼女たちの状況は、小杉ほか(2017)、「わくわくシニアシングلز」⁽¹⁷⁾や阿部彩⁽¹⁸⁾が指摘してきた。最近では和田(2025)が問題化している中高年女性の貧困の問題へと接続していくが、そのことをどのように把握したらよいか。中高年女性の貧困の問題への接続を見つつ、改めて若年女性が置かれた状況へと視点を戻すとき、そこにどのような課題があると言えるのか。今後の検討課題である。

(すぎた・まい 東京都立大学人文社会学部准教授)

【参考文献】

- 木戸口正宏(2025)『自立をめぐる困難と希望——若者たちの生の軌跡から』高文研
- 小杉礼子・鈴木晶子・野依智子・(公財)横浜市男女共同参画推進協会(2017)『シングル女性の貧困——非正規職女性の仕事・暮らしと社会的支援』明石書店
- 小杉礼子・宮本みち子編著(2015)『下層化する女性たち——労働と家庭からの排除と貧困』勁草書房
- 後藤道夫(2024)「配偶をめぐる格差——低所得・未婚——の拡大」特定非営利活動法人非営利・協同総合研究所いのちとくらし「研究所ニュース」No.88(2024年11月30日)
- 杉田真衣(2006)「家族をつくる」乾彰夫編『18歳の今を生きぬく——高卒1年目の選択』青木書店
- 杉田真衣(2015)『高卒女性の12年——不安定な労働、ゆるやかなつながり』大月書店
- 杉田真衣(2022)「不安定雇用を生きる女性とコロナ禍」『月刊東京』433号
- 杉田真衣(2024)「女性支援のための新たな法律」『教育』942号
- 杉田真衣(2024)「不安定雇用を生きる女性労働者と労働運動」『学習の友』849号
- 鈴木大介(2014)『最貧困女子』幻冬舎新書

(16) change.org オンライン署名サイト「中高年シングル女性を女性支援新法から排除しないでください。厚生労働省に善処を求めます」<https://c.org/ZmhwmrVXHW>

(17) 大矢さよ子・湯澤直美編、わくわくシニアシングلز著(2018)『シニアシングلز 女たちの知恵と縁』大月書店。2022年にも中高年シングル女性の生活実態調査を実施しており、わくわくシニアシングلزのホームページ(<https://seniorsingles.webnode.jp/>)からその結果を見ることができる。

(18) 阿部彩(2024)「相対的貧困率の動向(2022調査update)」JSPS22H05098, <https://www.hinkonstat.net/>

- 高山智樹（2009）『『ノンエリート青年』という視角とその射程』中西新太郎・高山智樹編『ノンエリート青年の社会空間——働くこと、生きること、「大人になる」ということ』大月書店
- 高山智樹（2015）「書評：杉田真衣著『高卒女性の12年——不安定な労働、ゆるやかなつながり』」『〈教育と社会〉研究』第25号
- 橘ジュン（2010）『漂流少女——夜の街に居場所を求めて』太郎次郎社エディタス
- 橘ジュン（2016）『最下層女子校生——無関心社会の罪』小学館新書
- 特別区長会調査研究機構（2024）『令和5年度調査研究報告書 特別区における女性を取り巻く状況と自治体支援の方策』
- 中西新太郎（2004）『若者たちに何が起きているのか』花伝社
- 中西新太郎（2008）「1995年から始まる」中西新太郎編『1995年 未了の問題圏』大月書店
- 中西新太郎（2009）「漂流者から航海者へ——ノンエリート青年の〈労働-生活〉経験を読み直す」中西新太郎・高山智樹編『ノンエリート青年の社会空間——働くこと、生きること、「大人になる」ということ』大月書店
- 仁藤夢乃（2014）『女子高生の裏社会——「関係性の貧困」に生きる少女たち』光文社新書
- 和田静香（2025）『中高年シングル女性——ひとりで暮らすわたしたちのこと』岩波新書